



# 今月の御聖訓



命は一定なり。其時の  
 なげきはたうじのごとし。をなじくは、  
 かりにも法華経のゆへに命をすてよ。  
 つゆを大海にあつらへ、ちりを大地にう  
 づむとをもへ

とにかくに死は一定なり。其時の  
 (当時)  
 なげきはたうじのごとし。をなじくは、  
 かりにも法華経のゆへに命をすてよ。  
 (露)  
 つゆを大海にあつらへ、ちりを大地にう  
 づむとをもへ

〔上野殿御返事 全集一五六一頁〕

## 目 次

### 今月の御聖訓

【巻頭語】〈竜口法難に学ぶ〉	菅野憲道	1
読書案内『鎌倉擾乱』	松田銘道	8
続・日興上人御本尊調査記録〔5〕	山上弘道	9
天地つかの間〔その・〕	成田詳道	13
<b>視点・焦点</b>		
① 戒名はいる？ いない		14
② “世界史上まれな” 勲章の王様		18
【寄稿】一泊研修会に参加して	清水光子	19
【恵日だより】		21
十一月の行事 霜月詠草 恵日俳壇		

お講講話(要旨)

拝読御書 「種々御振舞御書」 (全集九一三頁)

# 竜口法難に学ぶ

菅野 憲道

今月は「種々御振舞御書」から大聖人の竜口の法難の際のお振る舞いを通して、そこに何を学ぶかを考えたいと思います。

## 《科学的に証明された竜口法難の奇瑞》

まず「竜口」とは鎌倉から西、江ノ島近くの海岸で、謀反人や蒙古の使者もここで頸を切られたという当時の処刑場です。この竜口法難は、「種々御振舞御書」に詳しく述べられておりますが、祈雨の争いに敗れた忍性等の讒言によって、日蓮大聖人の一門に幕府の弾圧が加えられ、大聖人が死罪に処せられようとした事件でした。

処刑場に連行され、大聖人が引き据えられ、執行人が刀の鞘を払って振り上げようとした、まさにその時に、光り物が現れ、あたり一面を皓々と照らしたのです。その奇瑞に驚いて死刑執行が中止され、間一髪で危地から脱れられたのでした。

芝居や伝説では、この時稲妻が走り刑吏の刀が三つに折れたということになっておりますが、このことは御書のどこにも書かれておりません。おそらく「刀尋段々壊」という経文に合わせた後世の脚色でしょう。しかし、この事件がおこったことは、

大筋において、ゆるぎない歴史的事実なのであります。

この法難があまりにも劇的な展開を見せ、部外者にはまるで映画か芝居のように見えるため、かつては一部の歴史学者が事件そのものの存在さえ疑問視したこともありました。また今でも、「光り物」が現れたということが、「種々御振舞御書」に記されているにもかかわらず、丁度この部分のご真筆がないことを奇貨として、信じない人もおります。

しかし、このことについては、何人かの天文学者がコンピュータ解析を行い、天体の軌道や現れる確率等を計算して、ちょうど竜口法難の時に江ノ島のあたりに流星物が現れたことを証明し、隕石として降ってきたとしても不思議でないことを論文に発表しております。

そのみならず、この御書の後の方に書かれておりますが、翌日の依智における星降りの伝説についても、従来否定的だったものが、研究者によって証明されているのであります。

これをもって非科学的な「奇跡」が起こるといふようなことを言うつもりはありません。

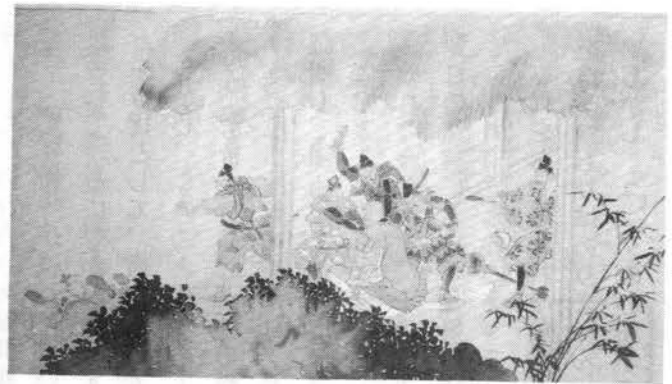
しかし、ユングの心理学という共時性(シンクロニシー)

や『百匹目の猿』で有名なシェルドレイクの「形の場」理論などに見られるように、常識を越えた現象は、我われも案外経験することです。少なくとも大聖人の仏法は、事の一念三千・法界即我を自己に実現する仏法でありますから、本有の妙法と境智冥合した時に個々の知識では計り知れない現象が働くのではないかと考えられます。法難の際おこった現象を考えれば、本仏の境界と自然界・宇宙法界と一体となった時、感応妙の理が現れたとしても少しも不思議ではないはずで。

このような現象について、世間の人々は奇跡を云々するインチキ宗教と同一視するかも知れません。なるほど非科学的な迷信や呪術を廃して、合理的な思考を持つことは大切なことでもあります。しかし宇宙や生命には人知をもっては到底計り知れない広さと深さを持っていることを謙虚に認めなければならぬと思います。科学的な真理も学問の進歩や新たな発見によって、大きく書き換えられていることを思えば、自分達が有する知識を絶対視して、こうした事実を無視することこそ危険なのであります。

法華経の行者日蓮大聖人の偉大さは、何も竜口法難の現象だけで云々されるわけではありません。御一代の振る舞いにおいてその偉大さが現れるのであります。むしろ鎌倉時代という歴史の実存世界で、現実に「法華経」を信じて行動した日蓮という人間があり、この生きた人間が、内憂外患で閉塞した社会状況の中、伝えられるような宗教的生涯を送られた内実こそが重要なのです。

たとえば、平左衛門が松葉ヶ谷の草庵を襲って、大聖人を逮捕連行しようとした際、いささかも怖れることなく、逆にその



名越の庵室での召し捕り

人々に対して、

「平左衛門尉がものにくるうを見よ。とのばら(殿原)、但今日本の柱をたをす」

(全集九一二頁)

と、叱咤されるのであります。凡人ならパニック状態に陥る状況で、このような堂々たる態度はどこから生じてくるのでしょうか。このあと問注所に連行され、表向きは悪口の咎による流罪ですが、その実は死罪に決したのです。

大聖人にもこのことは分かっておられたのでしよう。鶴岡八幡宮の前にかかった時に、馬から降りて社頭から八幡大菩薩に対して、高声に諫曉し、

「教主釈尊に申し上げ候はんずるぞ。いたしとおぼさば、いそぎいそぎ御計らいあるべし、とて又馬にのりぬ」

(全集九一三頁)

と厳しく申されております。つまり、迫害にあっている法華経の行者を守護せず、教主釈尊との誓いを破って見捨てるならば、斬首の後霊山にて釈尊に申し上げて、法華守護の諸天たちは大変な咎めを受けることになるであろう、との大確信で八幡神を叱咤されたのです。

さらに、道中で童子を遣わされて、駆けつけた四条金吾や他

の檀越に対して、自分は今度法華経のために命を捨てるのであると仰せられ、続けて

「されば日蓮貧道の身と生れて、父母の孝養心にたらず、国の恩を報ずべき力なし。今度頸を法華経に奉て其の功德を父母に回向せん。其のあまりは弟子檀那等にはぶくべしと申せし事これなり」(全集九一三頁)

と、これから死地に向かう人とは思えない言葉を述べておられます。

こういう一言一言に、大聖人の計り知れないお心が示されており、こういう精神をもった方は、あらゆる宗教界・思想界を探しても、希有のことではないかと思えます。

特に今のようない時代になりますと、ただ自分一個の保身に汲々としている人間が多く、我われは人間が小さすぎるので、大聖人のお振る舞いがなかなかピンとこないし、自分の尺度で物事を考えますから、想像力の乏しい我われには大聖人の偉大さや深いお心が伝わってこないのではないかと思えます。

### 《竜口の頸の座の意味》

結局処刑はされませんでした。もしこの法華の僧を手にかけてればとんでもないことになるかと怖れて、誰もが遠巻きにして顔を見合わすばかりだったといえます。大聖人は役人に「何をばやばやしているのですか。早く処刑しなければ夜が明けて見苦しいことでしょう」と迫ったけれども、何の返事もありません。そのうち幕府の使いがあって、とりあえず相模の依智(厚木市)にあった本間六郎左衛門の館に、一時預けということになったのです。

依智では明日の命も保証されないうちに、約一ヶ月程留め置かれ、やがて冬になる前に急に佐渡流罪に旅立つことになりました。

こうした過酷な状況に対して、大聖人の精神的な変化がどういうものであったかは、佐渡で書かれた「開目抄」に、

「日蓮といふ者は、去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此れは魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしろして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みんないかにをぢぬらむ。此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の、未来日本国当世をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし。」(全集二二三頁)

日蓮の頸は刎ねられたと言われるのですから、この法難を境として非常に重要な心境の変化があったことが知れるのであります。少なくとも、日蓮は竜口で死んでしまったというご自覚、その後の姿は魂魄、即ち妙法蓮華経の魂魄、法華経が日蓮をして生かしめ行動しているというご自覚です。

普通、我われが法華経を信ずるといえば、法華経に入る、信によって仏の絶対的な世界に入ることの意味します。

日蓮大聖人も絶対的な信によって身命を法華経に投ぜられ、妙法蓮華経の世界に入られたところが首の座です。こんどは妙法蓮華経の絶対世界から相対世界に出てこられて、この現実世界で法華経を广泛宣传し仏国土を具現しようと言っているのです。

本宗ではこれを発迹顕本といい、大聖人が久遠元初の自受用身・本仏としての本地を顕わされたという重要な意味を持つ法難であります。この事件を契機として発迹顕本されたご境地を一幅の御本尊として顕わされたわけです。

身命を供養して久遠の本仏の寿命にかえた大聖人が、その境界をそのまま一幅の紙の上に認められ、それを本尊とされたのであります。

「頸はねられぬ」とあるわけですから、大聖人にとって一個の自我をもった日蓮は死んで、蘇生した日蓮は、法華経が人格化した存在、法華経信仰の実存としての法華経の行者であり、「生きた法華経」そのものだったわけです。ここにおいて法華経は過去の歴史的遺物でもなければ、観念的思弁哲学ではなく、事の一念三千の法門として、現実世界に苦惱する煩惱重き我ら衆生の手にもたらされたのです。

### 《大聖人のお振る舞いに学ぶ》

それから次に、この法難において法華経の読誦や受持の意味が明確になります。

世間でも言行一致ということが大切です。まして仏法においては、身口意の三業に受持・読誦することが重要なことはいまでもありません。身読とか三業受持ということについては、いつも述べておりますから省略しますが、仏道修行の要諦は、結局「一心欲見仏不自惜身命」の経文を身に当てて読むことに他なりません。身軽法重をどこまで実践できるかが、修行ということではないでしょう。

思いますに、宗教者というものは元來学者とは違いますから立派なことを書いて残すということではありません。積尊やキリストの場合も今残っている經典とか聖書は、その人格にふれて、そのすばらしい言説や行動が弟子によって筆録され後々の世に伝えられたのであります。

大聖人の場合も同じことでありまして、御書の多くは折々に弟子檀越に宛てた消息がほとんどであります。ご自分の信仰や思想を体系化された長編のものはありません。また、数編の消息・伝聞や教説だけで弟子檀越が帰依したとも思えません。過酷な弾圧にもかかわらず多くの弟子檀那が帰依したのは、むしろ大聖人の振る舞いにあったような気がするのです。

ともすると御書だけで大聖人の仏法がすべてわかったような気になりがちですが、それは知識のレベルであって、信仰の次元とは違うような気がします。

御書を深く学ぶことも大切ですが、富士門流においては「極理を師伝して」、すなわち、大聖人のお側で常随給仕され、その中で学び取ったものを相伝として一番大切にしてきたのではないのでしょうか。つまり、大聖人のお振る舞いをまのあたりに見た日興上人等のお弟子の方々が、法華経の精神を今度は自身のものとして振る舞いをもって伝えてきたのでありまして、この場合文字から伝えられる情報としてではなく、人から人へ伝えられてきたことに意味があったのであります。「教主積尊の本懐は人の振る舞いにて候ぞかし」とは、末法の法華経は、法華経の実存的実践を通して示される人格そのものであります。

### 《生死を越えて自ら身命を惜しまず》

考えてみますと世法のことでも、例えばガリレオ等の科学者や医学者の殉難の話や、ロンブス等の冒険家にしましても、政治運動家や明治維新を成し遂げた志士達にしても、人に先駆けて道を切り開いて来たような人々は、いずれも身命を捨てるほどの決意をもってことに当たらなければなりませんでした。

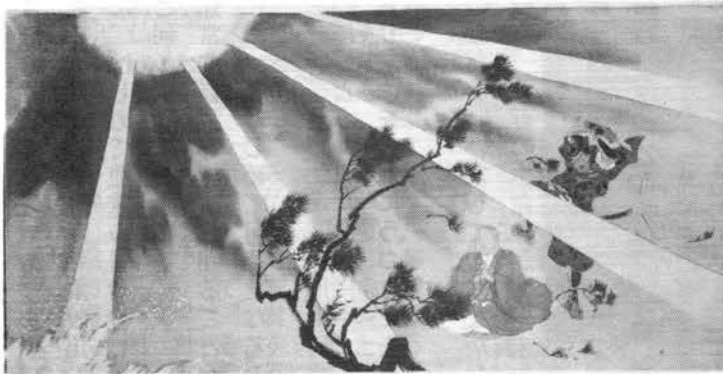
すなわち理想を求めたり真理を体得するには、必ず不惜身命の決意がなければできません。「朝に道を得れば、夕べに死すとも可なり」という格言が示すように、求道の情熱によって一生を燃焼させた人々が世間にも数多くいたのであります。

ましてや仏道修行においてをやであります。

御書にはいたる所に、雪山童子の喩や樂法梵志ぎやうぼうしんじの喩、あるいは薬王菩薩が肘を燃やした話、須陀摩王の話や普明王が頭を刎ねられた話など、釈尊が過去に仏になるために修行した時代の喩をもって、自分の命を投げ出して法を求めたことが記されています。そして、このような例示の意味は、成仏にいたる道筋であり、その法則なのです。

本当に我われが真実の道を求めるには、我われをがんじがらめに縛り付けている自我（エゴ）の殻を何とか打破して、煩惱から解放しなければ本当の道は開かれてこないということではないでしょうか。

成仏をめざす時、修行すればするほどいろんな魔が現れます。法華経や御書には、法華経を自行化他にわたって如説修行する時、それを妨げる三障四魔や三類の強敵が紛然として競い起こること説かれています。幾度も難を克服して修行し、なお一番



竜口での奇瑞

最後には最大の障碍、「元品の無明」にぶつかるといいます。これは、自己保存の本能といえますか、自分だけが可愛い、自分だけを特別扱いしようという魔のことで、これを克服しないと生死を超越した本有の世界までいかないのです。

もし大聖人が竜口の法難に連行される過程で、ちょっとでも「何で自分はこんな目にあわなければならないか」とか「正しいことをやってこれでは割に合わない」等と疑念が生ずれば、そこで大聖人はお終いになってしまったのです。ほんの少しでも打算の気持ちや、名聞名利や、後悔の念が働いていたなら、諸天の守護という、あのような感應妙を引き起こすことは無かったはずで。

しかしながら大聖人は「本より期するところ」「こころゆえなり」とのお言葉通り、最後の最後まで腹が据わっていましたが、元品の無明を打ち砕いて降魔の姿を示されたのであります。この法難はその象徴的意義を有するのであります。

#### 《相対的な自我を知る》

法華経の中にはいたる所に、

「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」

「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」

等と、仏道修行というものは身を惜しんでいてはできないと仰せであります。それは自我意識でとらえた自分は、「人久しといえども百年には過ぎず」（全集一三三六頁）と仰せのように、露の命であって無常を免れ得ません。

歴史的・社会的に有限な存在として、相対的な現実存在の我われが、真に己れの相対性・有限性を知るのには、絶対的なもの

を基軸として我が身を照らすときに自覚できるのであります。たとえば地球という惑星に存在する人類が、地球から飛び出して自分たちの世界を眺めたときに、はじめて地球の素晴らしきも人類の愚かさも自覚できたのと同じことでもあります。

有限な自己を有限と自覚し、無常な自我を無常と知ることが出来るのは絶対的なもののまえにたつてはじめて可能となるのであります。

大聖人はいみじくも熱原法難の際に、とらわれた農民に、「つゆ(露)を大海にあつらへ、ちり(塵)を大地にうづむとをもへ」(全集一五六一頁)

と申されましたが、口では永遠の命だといいますが、なかなかそれが分かるものではありません。本有の生命とか父母未生前の命と表現されるものは、自我意識や肉体にあるのではなく、生死を超越した三世常住のところにあります。自我意識はその生命の上に、一時の因縁によって個性が現れたり消えたりしているのです。この本有の生命は、有我的意識を徹底的に打ち破らないと、我われの意識の上には現れてはきません。

世間でも「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」とありますが、思い切ることによって有我的束縛から解放され、本有の姿に立



梅の古木に星が下った

ち返ることができると思うのであります。しかし、自分自身が分からないものが、自分の執着を立ち切ることが出来るはずがありません。そこに、元品の無明を切る利剣として、南無妙法蓮華經の信仰があります。

よく考えてみれば、自己を取り巻く肩書き・名譽・財産・業績などという付随的なものは、一度臨終を前にすればまったく無意味なものになります。かえってそういうものがあるために苦しんだり迷ったりすることすらできます。そうして、最後臨終には自我意識と肉体が残り、その自己ですら死に直面すれば崩壊して無に帰してしまふ。その後何が残るのかということになります。よく「本来無一物」などと禪の方などでは言いますが、我われはもともと裸で生まれて裸で死んでいくのですから、露のようなものです。

しかしその露は大海に通ずる一滴です。妙法蓮華經を信じて受持するものの眼前にはこの大海が開けているのです。

そのことを腹に据えていったら、つまらぬことで悩み苦しむこともないと思うのです。たとえどんなことがおきようと、全部人生のドラマを盛り上げる一シーンとして肯定して、楽しんでいくぐらいの境地になるのではないかと思います。

#### 《まずは唱題から》

鎌倉時代に流行した仏教は、本来仏教といえるものではありませんでした。なぜなら、仏教の教えというのは最終的にはなにかして、「如我等無異」といって一切衆生を仏と同じ境界にまで自立させようというものです。

しかし当時は浄土思想という一種の現実逃避の思想をもって、

衆生を羊の群のように支配したり、真言宗のように祈祷・呪術をもって衆生の欲望を祈って煩惱の病を重くしたり、はたまた禪の思想は謂己均仏という一種のニヒリズムであって、いづれも現実に生きる人間や社会の向上発展にはマイナスの、邪見を増長させるような教えでした。

しかも、時の権力者（朝廷や武将）の政治体制を維持するための、権力に奉仕する翼賛的な御用仏教でもあったのです。

本来の仏教は、国家権力の支配から独立して、まったく独立した立場から衆生を化導していかなければならないのですが、日本の仏教は、最初から国家仏教として、むしろ政治体制の矛盾を補完するような形でスタートしたことが災いしていたのです。こうした貴族仏教的な体質が差別思想をも増長する結果にもなっていたのです。

一般的に仏教というものは、諸法実相といつて、物事の本質的な姿や普遍性を追求する教えでありますから、こうした特質が、歴史性を無視し、現実や社会的矛盾に背を向けた観念哲学として、人間の内面的救済はともかく、現実に苦悩する個人や社会の救済力となり得なかつた面が指摘できましよう。

また日本仏教の特色として、本覚思想や「自然法爾」の考えが、現実を直ちに肯定する理即本覚説をもたらし、非倫理的な煩惱肯定にまで墮落する背景として批判されております。

しかし日蓮大聖人のお立場は、絶対的な法華経の信に入ったところから、こんどは一転して相対的世界、歴史的世界に出て、この現実の社会で悪戦苦闘しながら法華経の精神を実証するものとして規定されているのであります。

「立正安国論」は、自然災害・経済混乱・内乱・侵略等の当

時の社会の閉塞状況の中で、苦悩する人々の救済を願って書かれたものであります。即ち日蓮大聖人によれば、真の仏法はたんに個人の救済にとどまるのではなく、社会の、国土の救済にまで広がっていくものでなければならず、個人が成仏できるなら、必ず社会全体、世界全体の成仏、仏国土の成就もできるといふものでした。

ここに、当時の仏教に対して、真つ向から批判を加えられた大聖人の立場が明らかになると思うのです。

「不軽菩薩の跡を紹継する」と申され、また「一切衆生の同一苦を受くるは日蓮なり」と述懐される大聖人には、過去の功德に安住して、安逸を貪るような怠惰な精神は微塵もなく、山の高みから衆生を見下ろすような優越感もありませんでした。ただただ同苦の精神をもって謗法の病に苦しむ衆生済度のために、生涯常に精進されたのです。

竜口法難の後、日蓮大聖人が、正直に自己の感懐を語り、「されば日蓮が、法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はをそれをもいできぬべし。」（全集二〇二頁）

と仰せのように、この法難によってはじめて実証された大聖人の境涯こそ、法華経の本仏の境涯そのものであるということをお忘れはなりません。

大聖人のお振る舞いを手本とすることは、我われには何はともあれまず唱題です。お題目を信じて唱えることによって慈悲心を起こし、その力をもってあらゆる難を克服し、精進していったきたいと思ひます。

南無妙法蓮華経

(了)

鎌倉時代は武士が政権を担った時代である。それだけにその一四〇年の歲月は、政権をめぐる争いも絶えることはなかった。まさに本書のタイトルのように擾乱の歴史そのものだった。

本書には鎌倉時代を代表する擾乱の物語が三編収められている。

一つは「非命に斃る」。ここには二代將軍源頼家が無惨な死を強いられる、その苦悩が語られている。父頼朝が作り上げた鎌倉幕府、その最高権力を担った長男頼家は、御家人の北条家の手によって殺されてしまう。また三代実朝も、北条家と三浦家との、御家人同志の謀略の犠牲となつて斃れる。この一連の事件に深く関わったのが母、北条政子だ。わずか三代で政権の手は御家人の北条家へと滑り落ちていく。

頼朝が築きあげた鎌倉幕府は、三代將軍の死とともに実質的には崩壊した。しかし鎌倉幕府が滅亡せず存続し続けたのは、北条家の巧妙な手口が効を奏したからだ。天皇の皇子を將軍として鎌倉に下向してもらう名手をうって出たのである。しかしその皇子の將軍の座も名ばかりで、実権は執権の北条家が握る。非命に斃れた頼家の死は、北条家が権力を手にする序章ともいえる。

次の「異形の寵児」は、北条家の独裁政治ともいえる得宗体制による政権が、一つの事件か

読書案内

松田 銘道



高橋直樹著  
『鎌倉擾乱』

文芸春秋  
一七〇〇円

ら揺らぎ始めた八代時宗の時代の物語だ。  
文永九年二月、日蓮大聖人が予証された自界叛逆難が鎌倉と京都で勃発する。二月騒動である。磐石に見えた得宗政権も、外には蒙古の襲来を、内には政権をめぐる争いに加えて、御家人と御内人との生き残りを賭けての駆け引きも動き始めていて、時宗には問題処理への難しい舵取りが待ち受けていた。その舵取りを微妙に狂わしていく擾乱の立役者が、平頼綱である。

ここで彼は彼が主役として登場する。  
平頼綱はその恵まれた才能を出世欲に遺憾なく発揮し、歴史の舞台上に登場してくる。そして執権に次ぐ地位にまで昇りつめる。しかし彼が掴んだ出世は策略と争いによって手にしたものだった。多くの人の命を奪ったとの苦悩が彼の心を責めたとき、上り詰めた出世が狂い始める。そして一夜にして一族が滅亡、との悲劇も生んでいく。豊かなその知性が、欲望に走って身を滅ぼす彼の人生そのものは、まさに「異形の寵児」だったのである。

この作品は直木賞の最終候補作にもなり世間の注目を浴びた力作で、本書のメインともなっている。  
最後は鎌倉幕府の舞台を閉じる物語、「北条高時の最後」が収められている。  
鎌倉に生きた人の苦悩を本書は語っているの  
(正覚院主管)

# 続・日興上人御本尊調査記録〔五〕

山上弘道

（平成九年八月十七・十八日）

佐渡 世尊寺・妙宣寺・

本光寺・妙満寺調査）①

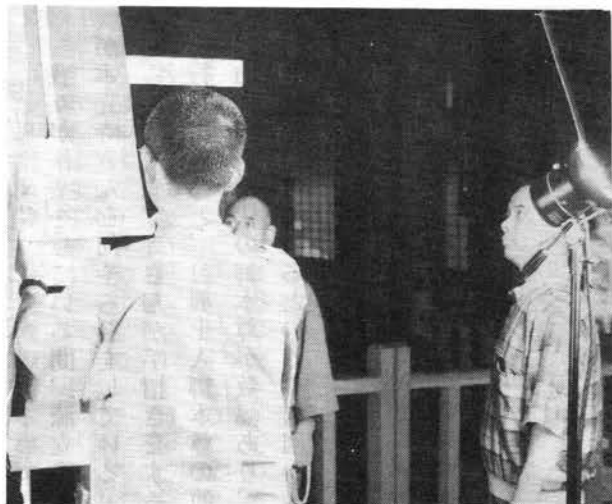
日興上人御本尊の調査が始まった平成七年から、もう何度佐渡に渡ったことだろう。その間世尊寺本間守拙上人はじめ多くの在島の方々の、暖かいご協力により多くの成果をあげることができた。しかし課題が残っていないわけではない。阿仏房妙宣寺と一谷妙照寺にまだ本格的調査が及んでいない。それと前回の調査の時はまだ三五ミリカメラで撮影していたので、既に調査済みの御本尊も是非とも6×7カメラに収めたい。これが今回の佐渡調査の目的である。

既に世尊寺・本光寺・そして今まで断られていた妙宣寺から調査及び撮影の許可をいただいている。妙照寺は住職の体

調がおもわしくないとこのこれまでと同じ理由で断られた。根本寺は一ヶ月ほど前に連絡したときは住職執事共に不在で、奥様が出先に連絡を取って下さったが大丈夫の様ですと行って下さったのだが、直前に確認の電話をすると宗務院から寺宝護持の通達があつて、以来写真で見せるようにしているので許可ができないとのことであつた。そういうことなら仕方がない。以前三五ミリカメラで撮らせていただいていることだし変に食い下がることはすまい。

今回は興風談所と関東軍の他に、源立寺菅野憲道師と執事成田詳道師、そして常光寺に在勤している原田知真師と大所帯である。仕事も多く、ことに妙宣寺は御虫払い中の十一時から二時までと、時間が制約されているから心強い。

源立寺さんとは当日佐渡両津港で待ち合わせ、渡辺信朝師・泰雄師は米沢法徳寺から新潟港で合流、池田令道師・成田詳道師・原田知真師は翌十八日宿泊地の世尊寺で合流予定である。



撮影の準備を進める（⑥成田執事）

八月十六日、朝霞にて大黒喜道師の到着を待ち、菅原関道師・坂井法暉師と共に赤城法華堂に向う。法華堂にてカメラ・御本尊奉掲機等の最終チェックをする。今回は世尊寺・妙宣寺共に資料が多いので、器具の改良・整備、カメラワークの練習など時間をかけて準備をした。

八月十七日、早朝五時法華堂を出発。八時新潟港で信朝師等と合流し、十一時半、予定通り両津港にて源立寺さんと合流、昼食の後まずは世尊寺に挨拶に伺った。世尊寺さんには調査撮影の他、今日と明日二日間、宿坊慈仙院に宿泊させていただくことになっている。世尊寺さんは相変わらずかくしゃくとしておられ、笑顔でわれわれを迎えて下さった。北山本門寺への晋山が決まりお忙しい最中であるのに申し訳ないことである。さつそくご挨拶と御礼、そしてこれからの大まかな予定を申し上げ、ずーずーしくも予定していなかった妙満寺への紹介をお願いすると、快く引き受けて下さりすんなりと調査の許可を得ることが出来た。一同御礼を申し上げ今回の調査の第一番目法教山本光寺に向った。

【本光寺】

約束の三時に本光寺に到着。住職にご挨拶を申し上げさつそく作業にとりかかった。御本尊奉掲機の組立も手慣れてきてスピーディーである。6×7カメラは今まで汗をかきかき私がやってきたが、今回から泰雄師にやってもらうことになった。照明の設定などもあらかじめ位置や角度を測り、皆で何度も練習したのでスムーズである。

準備が整い御本尊を奉掲して先ずは寸法・紙数・脇書・裏書きなどの再確認。寸法が前回の計測と若干の違いがあった以外は、前回調査以上の発見はない。寸法は測る位置などでその度に違いが出るが、縦横一センチほどの違いがあったので参考にそのデータを挙げておく。

一、日興上人御本尊

延慶三年六月十三日

縦九七・一 cm (前回九八・五 cm)

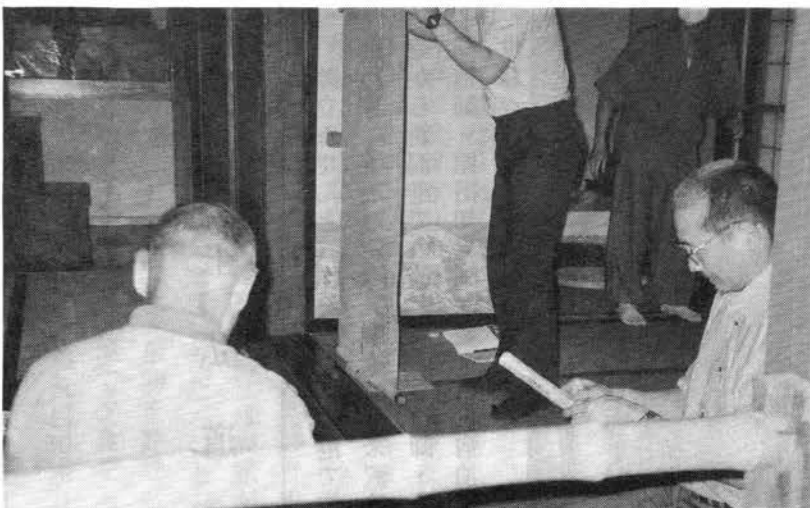
横五〇・一 cm (前回五一・二 cm)

一、日興上人御本尊

正和元年七月十五日

縦九七・五 cm (前回九八・七 cm)

横五〇・八 cm (前回五二・〇 cm)  
我々が作業をしている間、源立寺さんが本光寺さんと何やら話をしている。しばらくして源立寺さんが手招きをするので行ってみると、日興上人御本尊の他に北山本門寺歴代の御本尊が数幅あり、写真を撮らせてくれるという。何回か本光



寺宝を調査するご住職

寺さんにはお邪魔しているが、目的の日興上人御本尊で頭が一杯で、ついぞその他の重宝に話が及んだことがなかったのだが、努めて住職との会話を心がけて、できるだけ重宝等の情報を得ることが大切であることを痛感した。写真に収めた重宝は次の通り。

- 一、日出師御本尊 天正三年卯月二日  
縦五四・〇cm 横三六・四cm 一紙
- 一、日健師御本尊

慶長七年五月二十六日

縦一〇二・二cm 横四五・二cm 三枚継  
脇書「佐州之内泉本光寺大圓坊日正授  
与之」

一、四幅まとめて表装分

- ①（右上）日殿師御本尊

「……六年……」

縦二三・〇cm 横一六・七cm

- ②（右下）日延師御本尊

寛文十一年七月

縦二七・九cm 横一三・六cm

説明書き「田端明善寺歴代開基」

- ③（左上）日出師御本尊

天正四年八月二十四日

縦二四・二cm 横十五・四cm

④断簡「説初分」三字、「而不合法」四字貼り合わせ。

尚、同断簡の下に、天正十九年七月二十六日の日付けを持つ池上本門寺十二世日惺師の、日朗師の筆である旨の鑑定書が表装されている。

この他日優師御本尊二幅・日要師御本尊一幅・日観師御本尊一幅などがあつたが、時間の関係もあつて撮影はしなかつた。次なる妙満寺さんとの約束の時間が迫っている。本光寺さんに御礼を申し上げて妙満寺に急いだ。

### 【妙満寺】

妙満寺には如寂日満師の御本尊が格護されている。門をくぐると本堂前にある樹齢三百年の通称「笹蟹ささがの松」が無惨にも枯れ始めている。松食い虫にやられたのだらう。

住職さんは待ちかねた体で出てこられた。さっそく御本尊の撮影にかかる。

一、日満師御本尊

延□二季ねん（年の異体字）卯月十八日

縦四六・〇cm 横三〇・〇cm 一紙

年号は一文字目が「正」のように見え

るが、恐らく「延」のいんによろが削損したものと思われる。寺伝によれば当御本尊の年号は「正中」である。寺伝はまた日満師を延文五年八十九才の寂としており、この説によれば正中二年は五十四歳だから問題はない。しかし『富士年表』は過去帳（どこの過去帳かは不明）により、同じ延文五年ながら五十三才の寂としており、堀日亨師も『富士日興上人詳伝』（以下『詳伝』と略記）六八一頁に同説をとられていて、これによれば正中二年は十八歳であるから常識的にいえば御本尊書写はあり得ない。生年についてはどちらもその根拠が必ずしも明らかとはいえず、その可否を決定し得ないが、妙宣寺に所蔵される日満師の三幅の御本尊が、貞和二年・観応三年・延文二年と日興上人滅後十三年以降であること、さらに日目上人でさえ日興上人の晩年によく御本尊書写をされていることを思えば、「正中」とするのには問題があるのではないだろうか。因みに右三幅の御本尊書写年次付近に「正□」に相当する年号をさがすと「正平」がある。しかし日満師はこの三幅の御本尊はもと

より、西山本門寺に伝わる『日代上人重須離山事』（『日蓮宗宗学全書』二巻三九六頁、以下『宗全』と略記）など、すべて北朝年号を使われており、「正平」は南朝年号だから日満師の記載としてはふさわしくない。かくして当御本尊の書写年次は冒頭示したように「延文」とするのが妥当であろう。右の八十九歳説は「正中」と読んだ為にできた伝説かもしれない。

また、『詳伝』（五八九頁）、『富士宗学要集』（以下『要集』と略記。八巻二二六頁）に妙満寺にありとして紹介されている、「造立し奉る施主敬白、真浄坊日満在り判、時に延文二年太歳丁酉卯月十三日之を成就し畢ぬ」という日満師の記載を持つという日蓮大聖人御影の台座は、住職晋山の時には既に無かったとのことである。

妙満寺さんは佐渡でインターネット開設第一号だそうである（宗教関係ではないことかもしれないが）。奥さんも立正大学史学科を出ているということで、宗史には大変興味があるとのことであった。住職は、日満師の遺跡としてかつて

は妙宣寺と同格であった妙満寺に、重宝が日満師の御本尊一幅のみということを感じて思うといわれた。そして、たとえ写真・コピーなりとも日満師の関係資料



宿舎でのミーティング

を手に入れたいとのことであった。我々ができる限りご協力したい旨を申し上げます。

帰りには佐渡名産のイカの一夜干しを沢山いただいて妙満寺を辞した。

宿泊をさせていただきたく世尊寺に到着した時はもう六時を大分まわっていた。世尊寺さんは成果はどうでしたかといつもながら包むような暖かな笑顔で迎えて下さり、お茶を出して下さった。改めて二日間お世話になることのお願いと御礼を申し上げ、明日以降の作業日程の確認をさせていただいたところ、あさつて十九日は急ぎよ会議の為北山本門寺に行かなくてはならなくなったので、できれば明日に世尊寺分の撮影もしてくれないだろうかとのことであった。朝八時頃から作業にとりかからせていただき、妙宣寺御虫払いをはさんで三時頃から続きを撮らせていただければ時間的には問題がない。そのようにさせていただくことを確認し、宿坊慈仙院にて荷物を整理した後、程近くの中華そば屋で夕食をとった。帰ると有難いことにお風呂の用意までしていただいていた。

「継続は力なり」である。だが古人は「型どおりの形式や技法を惰性的に繰り返す、獨創性や新鮮さを失う考え方」をマンネリズムと釘刺している。そうであれば外面的には、初めの方式を繰り返して持続させながらも、内面では日々に進展充実化する推移が要求される。つまり継続から、目的意識と向上努力を差し引いた、お釣りがマンネリであるか。

## 天地つかの間

(その二十五)

成田 詳道

さて正信会法華講の足跡を見返ると、どうも近ごろ歓喜も乏しく、マンネリとの声がある。しかしその原因を他人や、組織といった外的環境に押しつけてはなるまい。マンネリは自身の目的意識の薄れと、向上努力の不足を警告する、点滅信号なのだから。

正信会は創価学会の信仰・社会の両面にわたる不正を糺し、日蓮正宗に富士の

清流を蘇らせる目的で結成された集団。

その方法手段においては、創価学会の是正、宗門運営の正常化、教学の整備充実などなど、各人各様の主張をゴチャ混ぜ、てんこ盛りに詰め込んだ状態で発足した。

そしてこの二十年の歳月で、もつとも大きな争点となったことは、住職の地位存在確認と、管長地位不在の裁判であった。つまり宗務院による正信会系住職の擯斥並びに寺院明け渡し請求は有効か否か。それと阿部師の管長就任の手続きは正当か否か。結論を司法の手に委ねた、長期裁判で全国の関係者が、時々判決に一喜一憂し、固唾を飲んで見守った。ところが少々、裁判の行方に力が入り過ぎてしまったのか、最高裁で双方却下の判決が下ると、肩すかしを食ったような気持ちで、幕切れを迎えた。それまで緊迫の続いた、寺院明け渡しの危機感が遠のき、各自の目的意識の薄れや、手段が目的化したりする現象が生じた。また個々の主張や意見が色濃くなり、組織の方向性を定める選択肢が拡大したぶん、逆に全国大会や行事などで獨創性や、新鮮さが薄れてきたように思う。

なるほど裁判は双方却下でも、昨今の宗・創の醜態劇や、大聖人の教えと隔絶した宗門をみると、何もせずとも諸天善神は正信会に味方するのでは、と錯覚すら抱いてしまう。

しかし今までがそうであり、今後もうであるように、宗門や創価学会の墮落脱落で、正信会が富士の本流に浮かび上がるわけではない。うっかりすると直木賞や芥川賞よろしく、成仏選考委員会で大聖人から、今回は「富士の本流賞」の該当者無しと、そろって引導を渡されかねない。

なにしろ大聖人の教えは、誰が一番かを決める信仰ではなく、各人が各人の力量に応じた、最善の努力精進をしているか否かをみて、合格か不合格かを決めるのだから。継続が真の力となるか、不用となった人工衛星のように、慣性の法則に身をまかせるかの境目である。

(源立寺執事)



# 視点

# 焦点

最近の新聞報道に、興味深い記事が載っていたので紹介したい。  
一つは、このところマスコミに取り上げられることの多い戒名についての発言で、浄土宗の宗務総長を辞任せざるをえない原因となった朝日新聞(六月二十三日朝刊)掲載の対談「戒名はいる? いらぬ?」。  
もう一つは、創価学会名誉会長池田大作氏に対する世間の評価を端的に示した産経新聞(九月八日夕刊)のコラム「斜断機」の「世界史上まれな勲章の王様」。

朝日新聞 (平成九年六月二十三日朝刊)

## 戒名はいる? いらぬ?

対談

浄土宗宗務総長 寺内大吉  
宗教学者 山折哲雄  
司会・構成 松井覚進 (企画報道室)

### 「戒名を売り物にしている印象」



寺内大吉氏

#### 「法然上人の教えにない」 山折氏「仏教教団全体の問題」

浄土宗の本山知照院(京都府京都市)の宗務総長寺内大吉氏(70)と、宗教学者山折哲雄氏(70)との対談。寺内氏は「戒名は法然上人の教えにない」と述べ、山折氏は「仏教教団全体の問題」と指摘した。

毎日新聞 辞任問題にまで発展したことを報ずる毎日新聞

毎日新聞(九月十七日夕刊)によると、浄土宗宗務総長で直木賞作家の寺内大吉氏(七五)は「日本名・法名は成田有恒が、六月三十日付朝日新聞朝刊に掲載の宗教学者、山折哲雄氏との対談「戒名はいる? いらぬ?」で、戒名のランク付けや値段について肯定的、具体的に言及したことに対して、宗議会側から「(宗派)が戒名を売り物にしている印象を一般市民に与える」「法然上人の教えにない」等との理由で、七月末、事実上の辞職勧告がなされていたことに応える形で、九月三十日からの定期宗議会で正式に辞任を表明する旨の報道がなされていた。

『患日』編集室でも、その対談記事を入手したが、最近マスコミ等で取り上げられる機会の多い、葬式・墓地・戒名等を考えるきっかけとなればと、ここに転載してみたい(以下全文)。

※ ※ ※

「戒名(または法名)は本来、仏弟子

## 寺内氏の発言 宗内から反発

浄土宗 宗務総長辞任へ

浄土宗宗務総長寺内大吉氏(70)は、法然上人の教えにないとして、戒名を「売り物にしている印象」を醸成しているとして、宗内から反発を招き、七月末、事実上の辞職勧告を受けて、九月三十日、定期宗議会で正式に辞任を表明する旨の報道がなされていた。

になって「出世間」をめざすための象徴だ。しかし現実には「死後の勲章」みたいになっている。

勲章好きの国民性の反映でもある。

——戒名は釈迦の説いたものにはないそうです。いったい何なんでしょうか。

寺内 戒名は死んだ時にもらうと思われていますが、これは運用の間違いで、本来は生前信仰に入ったあかしとしていただけものです。キリスト教の洗礼名みたいに。

山折 戒名は日本の死者儀礼と結びついて発展した。インドのヒンズー教徒は死者を焼いてガンジズ川に流す。魂が昇天するわけだから、それが大事で、遺灰には重きを置かない。お墓をつくらなければ戒名のようなものは発生しようがない。日本ではお墓をつくるから、死者を象徴するものが必要になってくる。

寺内 庶民が生前に戒名を受けることができたのは鎌倉仏教以後でしょう。比叡山（天台宗）とか高野山（真言宗）とか国家とつながった平安仏教が鎌倉仏教となり、法然（浄土宗）、親鸞（浄土真宗）、あるいは道元（曹洞宗）、日蓮

（日蓮宗）といった方々ができて民衆と接触して……。浄土宗ですと阿弥陀号というのをつけていましたな。俊乗房重源という人が大仏勧進をやりましてね、（東大寺の）大仏復元の寄付集めをした時にお金を出してくれた人に阿号をつけました。こういうのが民衆と戒名の触れ合いのスタートじゃないでしょうか。

山折 時宗は阿弥号をたくさんつけるようになる。だが、どうでしょう。例えば親鸞は出家して縛しやく空くう、それから善信、親鸞となった。旧仏教のように戒律を積んで出家者になったのではなく、自分の信仰の確立を名前を変えることで自覚する。これは鎌倉時代の最も重要な戒名の原形でしょう。

江戸幕府以降、檀家制度だんかが成立して仏教が家の宗教となり、家で仏事をする。それが先祖崇拜と結びついていく。お骨を仏壇に安置する段階がある。今度はお墓に入れて、そのかわり位はいをつくるようになり、お坊さんが戒名をつける。それが庶民の間に広がっていった。

寺内 織田信長や豊臣秀吉の時代にキリスト教が入ってくる。キリシタンが洗礼

名を信者全部につける。やがてキリシタンが禁制になる。それは自分はキリシタンではないと区別するために……。これが庶民の戒名の発達の原点のような気がします。

「一生懸命生きた人へ」

一生に一度の「死後褒章」

——戒名にランクがあるのはどういうわけですか。

寺内 私たちの場合は、仏教の基本的精神からいって、長生きした方というのは一番徳を積んだ方だから立派な法名をお贈りする。生前、社会的に功績のあった方には字の多い法名をお贈りする。ところが、長生きもしないし社会的功績もあまりない人は、お寺への功績でつけざるをえない。それでお金をちようだいする。

一番大きいのは、何々院殿とつくんです。院だけじゃなく、その下に殿が、そして何々何々大居士となる。こうすると十何文字になります。院というのは、本来は（位はいのための）お仏堂を建てるんです。一軒で三千万円とか五千万円。



は。

山折 政治支配の技術として、中央に国王がいて、国王との距離に応じてステータスが決まっていくな。それを象徴するのが勲章です。戒名は仏陀との距離なのか、ご本山との距離なのか。ある中心的な権威との距離関係を何らかの形で表現したがるのが、われわれにあるわけです。勲章は非常に巧妙な支配の装置のような気がします。そういう性格を戒名は持っていると思います。国家や社会、教団に対する不満を持っている人びとを吸収してしまうということがありますね。

「戒名料のつり上げは

「勲章」求める側にも問題

——戒名料というのは、どうですか。

山折 高すぎるという感じはします。

寺内 墓地の場合は地価が積算の根拠になります。戒名の根拠はありませぬ。戒名料は必要経費として相続税の中から引かれるんです。きちんと領収書を出せば、持っているお方の場合はちつとも損ではないんですよ。「お戒名は？」と聞かれたら、私は檀家の方にはつきりと言っちゃう。「おたくは年が若いんで、院号をどうしても希望するなら五十万ぐらいはどうだろう」「おたくのご主人の一月月の給料ぐらいの基準で考えておくれよ」と。

山折 サラリーマンの感覚では高すぎるのでは？

寺内 そりゃそうです。でも、一生に一度のことだから。

——寺の経営にかかわる？

寺内 そうです。何も恥ずかしいことではない。坊主自身がお金を変に使うと思うから恥ずかしいんであってね。

山折 私は個人的には戒名はいらんと思っています。これからの若い世代は葬式

も従来通りやらず、墓も持たないようになる。死者供養のやり方が多様化していくでしょう。戒名への考え方も変わっていくと思います。重要なのは死後の世界をどう考えるかということです。死後の世界は完全に存在しないかというところ、おたおたしちゃう。そうすると戒名をつくりたくなる。

寺内 私の中の教養みたいなものが、死後の世界はないと思わせる。でも、女房、子どもなど、いろいろなことを考えると、あると自分で納得するわけだ。そういう複雑な二重、三重の精神構造が死に対する考え方の中にあるんじゃないですか。

山折 近代化すれば当然、死後の世界はないというふう論理的にはなるんだけど、観念の世界では転換できないというふうでしょうね。

編集部注……浄土宗内に物議を醸した辞任騒動であったが、その後の新聞報道によれば、寺内氏は宗議会において辞表を提出。一旦は受理されたものの、直後に行われた選挙において再選され、現在も宗務総長の任にあるという。とんだ茶番に終わったようだ。

コラム〈斜断機〉

# “世界史上まれな勲章の王様”



月刊誌「潮」をはじめ創価学会の一般

向け出版物はいろいろあるが、そのひとつ

「創価学会ニュース」を見ていつも驚

くのは、その大半が一個人の宣伝にあてられて

八月号を例にとれば「世界的彫刻家と

語らい」「モンゴル国立大学の名誉哲学

博士に」「世界百都市が顕彰」「中国蒙

古文学学会の名誉顧問に」などなどの目

次のもとに扱われているのは、「上、御

一人」池田SGI（創価学会インターナ

ショナル）会長のみ。例えばこんな調子

だ。

「池田SGI会長に対する世界の最高

学府からの『名誉博士』『名誉教授』の

顕彰は、これまで四十五を数える。決定

通知があったものを含めると五十を超

え、全世界の歴史上、極めて、まれであ

る。五〇もの大学からの『英知の宝冠』

——それは何より雄弁に、世界が認めた

SGI会長の業績の普遍性（ユニバーサ

リティー）を物語っている

「『世界市民』としてグローバルな平

和行動を展開する池田SGI会長には、

## 斜断機

「池田SGI会長に対する世界の最高学府からの『名誉博士』『名誉教授』の顕彰は、これまで四十五を数える。決定通知があったものを含めると五十を超える。これは何より雄弁に、世界が認めたSGI会長の業績の普遍性（ユニバーサリティー）を物語っている。『世界市民』としてグローバルな平和行動を展開する池田SGI会長には、これまで海外一〇七都市から顕彰が行われている。英知の宝冠、宝冠などを贈る、海外の市の市長などから贈る『英知の宝冠』は、池田SGI会長に贈られた。第二に、勲章や顕彰の多さをこれほどまでに喜ぶということ、名譽欲の旺盛な俗物性を宣伝するようなものであつて、仏教指導者としての深い自覚と資質に欠けることの証明ではないこと。日本は大転換期。この大教団もいよいよラストラの時を迎えたようだ。（治）

### 名聞名利を皮肉る「斜断機」

これまで  
海外一〇  
七都市か  
ら顕彰が  
行なわれ  
ている。  
最高賓客

・特別顕彰・名誉市民・勲章・市の鍵など、その榮譽は多彩。そのうち名誉市民に相当する称号は、七〇余都市から贈られている」

まことに、まことにおめでたいことと申し上げたいところだが、この礼賛記事を文面通り受け取る者は、忠実なる信者以外はあまりいないことを、そろそろ編集者は理解したほうがよからうと思う。

第一に、掃いて捨てるほど与えられた名誉博士・名誉教授は「英知の宝冠」などではなく、信者の汗の結晶である莫大な「寄付金の宝冠」であること。第二に、教授や博士の称号をかくも有り難がるということには、池田会長個人に学歴不足、学問不足の抜き難い劣等感があると見透かされること。第三に、勲章や顕彰の多さをこれほどまでに喜ぶということ、名譽欲の旺盛な俗物性を宣伝するようなものであつて、仏教指導者としての深い自覚と資質に欠けることの証明ではないこと。日本は大転換期。この大教団もいよいよラストラの時を迎えたようだ。（治）

〔寄稿〕

# 一泊研修会に参加して

服部地区 清水光子



九月六日。一泊研修の朝は、あいにくの雨でした。私はまだ一度も参加したことのない主人と、一緒に参加させていただけました。

しあわせ村は甲子園の五十倍もある敷地の中に、子どもから大人まで、お年寄



ご夫婦で参加された清水さん

りも障害のある方でも、誰でも楽しめる総合福祉ゾーンです。キャンプ場、運動場、乗馬、ゴルフ場、テニスコート、室内には温泉、プール、体育館等、いろいろな施設でいっぱいです。でもその日は雨のため研修室に入り、ご住職の講義から始まりました。病気に関する御書を抜粋されて、ご住職ご自身の体験を通しての講義がありました。

人は病気に対して、どうしても悲観的に考える傾向があり、大変な状態であった時、絶望的になりがちだが、まず医者を選ぶこと、病院を選ぶこと、薬の知識を持つこと、そして病気になる原因を知り、無知からくる不安を取り除き、自分だけの世界で考えない。病気には、肉体的苦痛と精神的苦痛があり、精神的苦痛の裏側には、必ず〈心の病〉がある。心の病は治し難い。病気は自分が治すの

であり、医者は手助けするのである。そして蔵と身の財（お金・時間）を惜しんではいけない。

「一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。」（全集九八六頁）

ということとは解っているようで解っていないものである。

病気をしたことは、マイナスばかりではない。「金持ちと病気になってない友だちは持たない」と中国の故事にあるが、人の痛みがわかる、健康であるということがわかるからである。また、病気に対し努力を惜しむべきではないが、若い間はそれ等ができて、老いてそれができない病人もいる。そのような、自分の力の及ばないものは、すべてを御本尊様にまかせることが大切で、そこに安心がある。

「臨終の事を習て後に他事を習ふべし」（全集一四〇四頁）

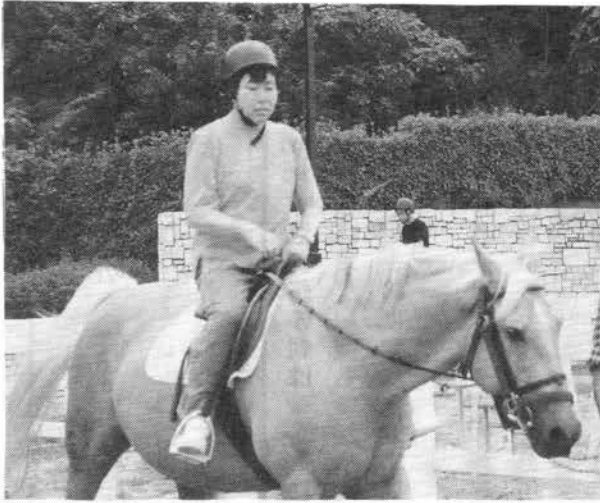
と、腹の底に信仰を据えてゆくべきである、とのお話であった。

わかりやすい講義であったが、誰でもいざれ迎えることであるのに、「ただ今臨終」の自分の信心ができているか、反

省ばかり。

夜の宴会は、カラオケです。講義されているご住職ではありません、マイクを持って唄うご住職です。みんなが唄いました。真ん中で盆踊りが始まりました。ダンスの人もいます。木村カメラマンは大忙しです。

カラオケで感動したのは、小さい時からご両親と一緒にいつもお寺に来ている服部地区の横田さんの息子さんが、お母さんと一緒にここにこして唄っている姿を見ていて、その成長が頼もしくうれし



乗馬姿も中々きまっています

く思いました。お母さんも普段見られない息子さんの光景に感無量であったことと思いました。

きつとこれは、一泊で一日中みんなと行動して、食事を共にして、ご住職がいつもそばにいらつしゃって、息子さんいつもにない安心感があつたのではないでしょうか。

外は雨ではあつたけれど、心はほのぼのとした気持ちになり、人里離れた村の静けさの中に秋を知らせる虫が、かわいい音で鳴いていました。

次の日は天気予報は雨だったのに、晴れ間が見え、後には晴れて、早速野外へ出て私ははじめて馬に乗り、少し偉い人になつたような気分でした。またパターゴルフコースに行き、これまたはじめて五人でまわりましたが、なかなか思うようにいかず、やいやい、わいわいといながら楽しく過ごしました。広々とした所でゆつくりと、主人は男性軍、私は女性軍とわかれての行動で、それぞれに楽しみました。

主人と一緒に参加できて、私にとって意義のある一泊研修でした。

【霜月詠草】

北海道 娘家族に 囲まれて  
〔梅本咲枝〕

幸福いっぱい 古稀祝う宴

古稀祝う 今日慶び 御本尊様と

語りて盡きぬ 生きし歳月

野の草の焼かるる匂い むらさきに  
〔坂本フミ子〕

秋深みゆく 風が運べり

コスモスの 群落吹きて くる風は

さやけき色に 染まりてぬくる

夜もすがら 枕辺に来て 鳴く虫の  
〔山田 絢子〕

音色聞きつ、 夢路辿りぬ

廻り来て 忽然と咲く 彼岸花

手折り遊びし 想い出を秘め

黎明に ざらざら燃ゆる 太陽は  
〔橋本 義一〕

命の根源 われに迫り来

こんな日本創るためには「戦わざりし」と

無念いだきて 横井さん逝く

ゴブラン織のごと色づける 紅葉山  
〔橋本 圓子〕

盲の友に 語らんとせしが

大阪のメインストリート「御堂筋」

オフィス街に 銀杏散り敷く

# 恵日だより

## 幹事会 ニュース

- 一、来年度の年間行事予定の検討
- 一月 「成人式」を、十日の土曜日に変更して行う予定です
- 二月 「お餅つき」を復活の予定。子供達はぜひ参加して下さい
- 四月 桃の花が咲く頃に、興風談所で「一泊研修」を予定します

五月 「全国大会」（千葉県）を日帰りか、研修旅行を兼ねるか、二手に分けて実行するか、意見を徴集しました。（未決）

九月 第四日曜日に「一日講習会」を予定しています

二、お大会式の諸役割を決定

三、住職御指導

- ①地区の再編成を検討しますので、意見・要望があれば早めに。
- ②講員同士の連絡と互助の精神を再確認し、講中の活性化を。
- ③立宗七百五十年（平成十四年）に向けて、記念事業を検討する。

## 宗祖日蓮大聖人御大会式のご案内

恒例の『宗祖日蓮大聖人御大会式』を左記の如く奉修申し上げます。  
源立寺法華講の各位におかれましては、万障お繰り合わせの上、ご参集下さいませようご案内申し上げます。

### 記

- 一、日時 お速夜 十一月八日（土）午後七時  
御正当会 十一月九日（日）午後二時
- 一、場所 源立寺本堂

## 五月山霊園が増設される

池田市では今年末の完成をめざし、五月山霊園の造成工事に着手しています。増設数は約五六〇区画（二、八平方メートル）で、募集は来年二月の予定です。なお、永代使用料は、以下の通り。

- ・二平米型 四十二万円
  - ・三平米型 六十四万円
  - ・六平米型 百二十八万円
  - ・八平米型 百九十六万円
- 詳細は、土木総務課（四五四・六二七〇）へ。（「広報いけだ」より）

## 【計報】

〔宝塚市〕 行年 七十二歳  
松壽院妙藤信女 俗名 前川ふしゑ之霊 十月十七日寂  
謹んでご冥福をお祈りします。

## 【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕  
コスモスや 宴のダンス 青い空  
華やかに 咲くコスモスの 中に立ち  
お化粧花の 群を見たさに 遠まわり  
秋雨の 通りし跡に こぼれ萩

# 十一月の行事

- 一日(土) 午後二時 お経日
- 二日(日) 午前八時 講中勤行会  
大掃除・お花作り
- 七日(金) 午後二時 広基寺お講
- 八日(土) 午後七時 お逮夜法要
- 九日(日) 午後二時 お大会式法要
- 十三日(木) 午後一時 お講
- 十五日(土) 午後一時 七五三祝い  
午後七時 目師会
- 二十三日(日) 午後二時 法華経講義
- 三十日(日) 午後一時 関西婦人大会  
(会場は森ノ宮・アピオ大阪)

※十一月一日の継命新聞の発送は  
『国塚・川西』が担当地区です

# 今月の宅お講

- 二十二日(土) 午後一時半 螢池地区(太田 勲宅)
- 二十七日(木) 午後一時半 旭丘地区(田中亀次宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします  
締め切りは、毎月二十日です。



## 恵日

平成九年十一月号 通卷三十三号  
平成九年十一月一日発行

編集兼 菅野憲道  
発行人 恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一〇〇 源立寺内  
☎(〇七二七)五一一三三三五  
E-Mail: genn@wobal.or.jp  
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)